

## 対談

## 環境教育の現状と問題点

## -なぜ起きる総合学習の空洞化-

甲南大学・谷口文章教授に聞く

21世紀社会におけるコンセプトは「環境と生命」が世界共通のキーワードである。さしあたって60億人を突破した人類にとってかけがえのない生活空間を地球的規模で守るにはどうしたらいいのかというテーマは将来にわたって避けて通れないし、そのための教育は何よりも重要である。では実際の教育現場はどうか。小学校から設けられている総合学習の中にきちんと位置づけされている環境教育が果たして実のある学習になっているのか。甲南大学教授で日本環境教育情報交流協会会長の谷口文章氏に中国をはじめ世界各国との幅広い交流や研究活動を通じて得られる体験をもとにわが国の環境教育にとっていま何が最も必要なのかを中心に語ってもらった。聞き手は本誌主幹・武田龍二である。

武田：一昨年暮れ、温暖化防止を目的にした世界フォーラムが京都でありましたが、環境問題は地球的規模で取り組まないとどうにもならないところまできています。世界を股に掛けて飛び回っておられる先生のご活躍を見ても、深刻な環境問題の一端をうかがうことができます。昨年夏場には中国・北京で開かれた国際的な環境シンポジウムに日本代表として出席されたと聞いています。

## 産学協同で環境教育の教材開発

谷口：中国でのお話をする前に、中国の環境問題と文脈がある私たち甲南大学の身の回りのことから進めたいと思います。いま環境教育実践の場として甲南大学の広野グラウンドを提供してもらい、学生たちと共に田植えと稲刈を体験させています。モチ米の有機栽培ですが、田植えにはゼミ生だけでなく他学部、他学科からも多数の参加があります。体験学習のあとはグラウンド宿舎に泊り、21世紀の環境問題と人間の生き方について夜遅くまで語り合います。これによって学生たちは環境に対する見方を少しでも開いてくれるわけです。それと郵政省からの助成金で甲南大学と三菱電機とが組んだプロジェクトチームを共同で作ったことです。助成金は1億5,000万円ですが、その中の1つに環境が入っております。他では法学部、理学部、経営学部と学部ごとのタテのチームですが、「環境教育情報プロジェクト」の場合は学部が全部ヨコにつながり広域副専攻という枠組みの中で環境に関する科目を設けています。従って先生たちは全学部から集まっていたいており、動画や視覚化されたものとかリアルタイムの情報を全部1カ所に集め、16科目の授業の中ですべてを使っています。私たちのオリジナルである奇形ザルや水俣病のビデオも動画の中に取り込み、全体として理解を助ける仕組みになっています。おそらく全国初のトピックになるとと思います。現在何とか実用の段階までこぎつけました。産学協同から生まれた情報教育における最先端の教材開発と自負しています。

## 中国との環境交流のきっかけ

では中国の環境問題に移りますが、そのシンポジウムは第1回で日中環境教育情報交流協会の設立を記念し、'99年8月16日と17日の2日間北京大学で開かれました。私も日本側交流協会会長として設立総会宣言と基調講演をしましたが、中国との直接のおつき合いは3年前の'96年12月にさかのぼります。甲南大学で「環境倫理と環境教育」と題する国際シンポジウムを開催するにあたり、その準備として同年10月、学生を連れて訪中したのがきっかけです。それから3年間、北京と神戸、東京で数回にわたり国際シンポジウムを開く中で「地球環境と世界市民」国際会議と日中環境教育情報交流協会の設立を考えるようになり、日中双方の間で協会設立の調印が行われたのが98年5月。こうして協会設立大会の準備が整い、第1回のシンポジウムに至ったわけです。

その間、オーストラリア、イギリス、タイ、カナダを訪問する機会があり世界の環境問題の深刻さを知りましたが、中でも日本と中国の関係は地域的にも協力が必要だなと感じました。2回目の訪中の時、山西省陽泉市の招きで炭鉱のクズ山を見学させていただきましたが、汚染された大気は陽泉市のみならず省を越えて中国全土に、さらに日本を含めて全世界に広がっていることを知りました。

## ほめられてよい中国・中学生の自己主張

中国の環境教育について言えば北京の101中学校の模擬授業を見学させてもらった時の模様がいまでも膾炙に焼きついています。後で述べますように日本の高校とはずいぶん違うなと思いました。中国の中学校は6年一貫教育で高級中学校が日本でいう高校にあたります。

環境教育の一環ということで昆虫の標本の展示を見た時に、日本では昆虫が少くなり標本を作るのはばかされると言いました。すると説明していた生徒は顔を真っ赤にして昆虫標本を作る正当性を大きな声であれこれ主張するのです。私の言うことにうなずけないのは中国の場合は自分の行動について正当化しないと潰されるからです。いい意味の自己主張ですが、最後に日本では自然を開発したり昆虫を取りすぎたため、昆虫が少なくなった。だから標本も作らなくなったと言うと初めてニコツとしてくれました。自己主張ができる精神力には感動しました。

私が見た範囲の都会の中学校ではこのように環境教育を行っていますが、理科中心です。日本の場合も理科だけでなく社会、国語、数学、音楽・芸術、道徳の中にももっと入れるべきだと思います。一応クロスカリキュラムと言われていますが、本来ならもっと広げて、統計数学で情報処理できるとそれも入れていいだろうし、倫理や現代社会にも必要ですね。しかし教科書はどうしてもきれいごとになります。背後にある人間の苦難の歴史みたいなものもぜひ取り込みたいですね。環境教育学会の仕事はこれからが正念場です。

武田：環境教育学会に期待することは多々ありますが、それほど一般にはなじみがない。設立されたいきさつと活動について。

## もっとパワーアップしたい環境教育

谷口：環境教育学会ができてちょうど10年になります。構成としては研究者、教育者、行政、そしてフィールドとこの4つの分野でできていたのではないのでしょうか。最初の数年間はフィールドの人たちが活躍していましたが、そのうち学術団体的色彩が強くなり、と同時に行政関係の間でイベントを中心とした活動が盛んになりました。現在は教育関係者が主としてがんばっているといった状況です。

ちょっと気になるのが文部省の指導が増えるにつれて内容が面白くなってきたことです。マニュアル化されることによってパターンが決まってしまう、かえってクリエイティブのものがなくなった気がします。



## 環境教育は地球的規模の交流から

私たちの研究室の場合、タイ、中国、カナダの諸国と絶えずコンタクトを取って研究していますが、環境教育においてはそのような研究成果が大いに反映されていると思います。

例えば大都会を除き経済的変動に左右されないのがタイの一般の人たちであり、そこでの特色は農業国だということです。だから経済破綻しても多くの農産物を持っているから一般の人たちはそんなに動揺しません。いま経済の高度成長をやらないとどうにもならないというのが中国です。そして高度経済成長を終わったのが日本でいまは成熟社会に入っています。さらにそれを越えてリファインされたのがカナダのブリティッシュコロンビアです。私が知り得るかぎりの狭い範囲ですが、これらの諸国をつないで時間軸がひけるような気がします。農業国（タイ）から経済発展（中国）があり、成熟社会（日本）を経てリファインされた社会（カナダ）という風にです。その中での環境教育や環境政策を追っていくと面白いものを発見できます。だから環境問題の場合、単一国家のある時代のことだけを調べてもあまり意味がありません。時間軸としての広さの程度は国によって違います。例えばタイは自然は潤沢だけど森林伐採という大きな自然破壊をやっています。その規模の大きさは、日本だけにいてもよく分かりません。それでも彼らはまだまだ広大な自然を持っています。学生を連れて行った自然公園はその公園だけで大阪府ぐらいの広さがあります。もちろん車で走り回らなければなりません。そのような規模の自然破壊や自然保護といっても日本人にはピンとこないですね。

## 政策に追いつかぬ個々の対策（中国）

それよりもっと広大なのが中国です。中国は一般論から申しますと環境政策は進んでいるけど、現状は非常に遅れているといえます。何しろ広すぎます。下の末端まで行き届いていないのですね。かつて国営だった企業で村に移管された工場がありますが、古い設備からくる大気汚染や工業廃液が原因で公害問題や環境破壊を引き起こしています。日本の環境庁にあたる国家環境保護局に訪問して話をすると、政策としてはきちんとしたものがあるんですね。アメリカの環境教育に生かされているグローブ計画を中国も受け入れ、それに沿って環境保護を進めています。全土の環境情報をすべてここに集中させるやり方も1つですが、少数民族にも環境教育は必要であるとして実際やっている。例えば「ラブリー・チャイナ 15,000km」という計画がありました。中国全土を車でキャラバンして、立ち寄った小学校でグローブ計画がどこまで実践されているのか、実際、中央電祝台（テレビ局）がカメラやビデオにおさめ、全国に放映したり、各地を回って展示会や展覧会をやるといった計画も進められています。去年はそれをやろうとして一步のところまで実現しませんでしたけど、環境教育や政策はこのように積極的にやっているといえますね。北京でも地方でも私たちが連れて行ってもらったところは確かにきちんとした環境教育がなされています。しかし大都市からはずれた地方のことは十分分からないことが多いです。広い国のことですから個々の環境対策の枠を決め、テーマを絞って細かく密に環境教育を実施していくのがいいのかなと思います。

## エビ養殖で猛害（タイ）

話はタイに飛びますが、森林伐採とともにいま問題になっているのがエビの養殖場です。日本でもたくさん輸入していますので関係がないとは言えないのです。沿岸にある養殖場ならまだしも内陸部に設備を作って塩水を引くからそれが塩害となって稲作に影響する。他国の問題として片づけられないところがありますね。環境教育は広い総合的な視野が必要で

す。

武田：いまお話しになったことを総合学習あたりでじっくり教えられないものではないでしょうか。

## 総合学習を環境教育にどう生かすのか

谷口：文部省が言っている総合学習の時間には4つの種類があります。環境、情報、国際理解、福祉・健康ですね。文部省の学習指導要領が発表された一昨年11月までの間は、総合学習の中のメインは環境教育でした。生活や総合理解につなげるとか、指定があるためにかえって保護者の間から情報教育ならコンピューターを、国際理解は英会話をといった強い声が出てきます。そうすると手段であるコンピューターや英会話が目的となり、目的である環境や福祉・健康がおろそかにされる傾向になります。総合学習を設けたばかりにですよ。このことが危惧されるというのが私たちの学会の意見です。総合学習といえばそのような科目はむしろ外国の方がしっかり意識されているのではないのでしょうか。

## なぜか通りにくい学会の声

武田：そこで環境教育学会として要望すべきことはきちんと要望するということはないのでしょうか。

谷口：文部省は学会というより特定の大学、特定の専門家と結びついていますから、学会としての声はなかなか通りにくい。環境庁はお金がないうえに、文部省と同じような結びつき方です（笑い）。だから文部省系と環境庁系の大学があってそれぞれ有能な先生方がバラバラでおやりになっているといった現状です。したがって研究の成果や研究者の意見は学会でも把握できていない。これは学会の中の中心的なご意見であって行政組織からは何の打診もありません。地方の組織は幾分ありますが、わが国の行政組織はむづかしいですね。だからといって学会宣言するのも大人げないから、ニュースレターという形で広報活動をつづけているわけです。

## 手段と目的が入れ替わった総合学習

武田：教育現場における総合的な学習時間、とくにその中での環境教育の位置づけはあいまいになりがちですね。いまお話しのように国際理解としての英語教育、情報としてのコンピューター教育は手段・技術であり、結果として生きる力を培う全人教育を目的とした環境教育が軽視される傾向は本末転倒だと思います。文部省は教育の総括を目的とした行政組織にすぎないのでから現場の実状を知り、行政に生かしてもらうためにもどんどん提言されるべきではないのでしょうか。そうでないと文部省自体が時代からどんどん取り残されることになります。

谷口：総合学習を必須科目にするだけでもずいぶん違ってきます。手段の目的化が起こってしまっているから次元が違う事柄が並列されてしまうと安易な方向に流れます。また総合学習は通常、学校教育に限定されて考えられがちですが、その本質を考えると学校教育を含むグローバルな教育と教材を念頭におかなければ、これからの環境教育としての成長はないでしょう。何よりもローカルな地域活動との緊密な連携と実践、地域活動に連動した地球規模での環境教育にもつながっていくと思います。

武田：ある大学の学長先生が環境系の学部を作るために各高校を回ったところ先生方は環境についてまったく関心がないし、知ろうともしないと嘆いておられました。

谷口：まず小、中、高校の校長先生が目ざめることです。上からモデル校に指定されたからそこそこ勉強しようということじゃないですか。いま全国環境教育賞（日本児童教育振興財団主催）というのがあり、私も審査員の1人です。8回目を迎えましたが、回を重ねる



につれて内容がだんだん面白くなっています。とくに総合学習科目の中の環境教育からの応募者が少なくなっています。フィールド系の場合は日本生態学協会というのがあって学校ビオトープのコンクールをやっており、私はその審査員もやっています。気をつけないと学校を小さくまとめてしまうのが目的になってしまい、トライ・アンド・エラーでもいいですけど何かを作りだしていくという気迫みたいなものが見えてこない。学校のカリキュラムに入るより、校庭の隅に池を作り、自然環境を復元する方が活気があります。いまの子どもに口で生きる力を言ったところでダメでして、実際に池掘りで汗を流さした方が生き生きするんですよ。

そのビオトープですけど発祥はドイツで学校や公園の片隅に自然という点を次々に作っていくと通路ができ、いずれ面になります。そこで身近な自然という名の生態系が復元されます。これも私たちはやっているんです。環境教育がカリキュラムの中へ入り形骸化してしまうため面白さが失われるのはどうしても避けなければなりません。

## 体験学習の中にもっと生かせ

武内：文部省は学校外学習をどんどんおやりなさいと言っています。例えば小学生の体験学習の中に環境教育を位置づけられたらどうかなと思います。カリキュラムの中では色々規制がありますからね。

谷口：本当はそれをやる能力を持った教師がおられない。おられても転勤されると代りがおらず、その学校は沈滞してしまう。繰り返しますが校長先生がもっと自覚して勉強しないと現場の先生がついていけない。文部省も書類で通達するだけでなく、その学校が具体的にどんなことをやっているかチェックできないとモデル校、指定校だけに終わってしまう。でき上がった文章は確かに立派ですが、そのあと継続できずに終わってしまう。私自身、哲学、心理学、倫理学、環境教育学と色んなことをやっていて焦点が合わなくなっていますが、幅広くやっている中から何かを掴めたらと思っています（笑い）。

## 環境教育は人間とライフスタイルを変える

武田：これがいまの時代ですね。いつか北京大学の学生は入試にも環境科目が入っているとお聞きしました。環境問題の学習は自分自身を見つめることになるから人間とライフスタイルを変えるいいチャンスにもなりますね。

谷口：日本の場合、大学生もそうですが、高校生も基礎体力がないのか、電車の床にベタと座っているのを見かけます。体力だけでなく精神力も弱く、ゆとりの授業といえはそのままゆるんでしまい、平気で廊下の長イスに寝そべったりする。なぜ、そんな若者に育つのか。親がまず子どもを叱らない。ほめるだけです。うっかり注意すると大学生が「ぼくは中学生ですから」と言ってみんなの前で開き直る。自己主張の強い中国の若者と比べようがありません。心身ともにひ弱になった原因を自分たちで探させるときっと環境問題とぶつかるはず。タイ、中国、カナダとかに行き帰ってきくと数カ月は異次元の世界に入ったような気がします。これは甲南にかぎったことではありません。学会の若手の中にも大人になりきっていない人をよく見かけます。成人式は20歳でなくよくいって30歳でどうでしょうか。式は今年から成人式は1月の第2月曜日になりました。年齢も30歳に変えたらいいですね。

武田：今年もご健闘をお祈りします。

(「私学ジャーナル」 Vol. 23 No. 1 新年号 対談より転載 発行元： 株式会社 私学教育振興会)

[\[RETURN\]](#)